

と必ず一度ふり返つて注目致します。他の動物は怖いと思つたら何れもみな、その儘こそくと逃げて行きますが、狐と云ふ奴は、それほど躊躇心の強い動物なのでございませう。それで疑ふは躊躇あると云ふところから、狐疑としたのであります。

最後の所は要するに、無量光如來應正徧知を見んとする決心を起し、疑を生ずることなく、無着の佛智と、自己の善根とに、狐疑することなく、深信して居るものは、自然化生の其の瞬間に、觀音菩薩と同資格のものになれる。と云ふことであります。

(3) 小量の智慧者は五百歳佛を見ず

見ヨ、無能勝ヨ、小量ノ智慧、不平等ナル智慧、減小セル智慧、極限セラレタル智慧ヲ有セル彼等ハ、五百歳ノ間、佛ヲ見ル事、菩薩ヲ見ル事、法ヲ聞ク事、法ヲ説ク事、善ヲ行フ事ヨリ除外セラレ、一切ノ善根ノ福德ヲ失ヘリ。疑惑ニ陥リタル心想ノナス所ナリ。

これはつまり、前の處で、深信し信解したるものは、自然化生して、蓮華の上に結加趺坐すると云ふことがありましたが、此處ではかやうに深信して居るものは、無量

の福德があるが、疑つて居るものは、無量の福德を失ふのだと云ふことなのであります。

佛智と云ふものは、平等であり、圓滿であり、且つ無量であります。それでこの小量の智慧、不平等の智慧、減小せる智慧、極限せられたる智慧などを以て、疑惑に陥りたる心想、善根の福德を失へることを、表したものであります。

(4) 牢獄の王子は享樂大なりや

其ハ下ノ如シ。無能勝ヨ、思フニクシヤトリヤノ灌頂王ノ牢獄ガアリテ、金ト、琉璃ト、ヨク身ニ合フ衣服、花環、華鬘、帶、各色ノ美シキ天蓋ト、布ト、絹トニテ覆ハレ、種々ノ華ガ散ゼラレ、貴キ香ノ薰ゼル家、階段、圓窓、露臺、穹窿等ノモノガ、七寶ニテ飾ラレ、金ト、寶ノ鈴ノ鎖ノ網ニテ覆ハル。四ツノ隅(四柱)、四門、四階段アリ。彼ノ王子ヲ或ル(罪科)ノ故ヲ以テ、天勅ニヨリ、其ノ牢獄ニ入レテ、黄金ノ鎖ニテツナギ、坐牀ヲ設ケ、多クノゴニカノ敷物ヲ敷キ、ツリカノ織布ヲ敷キ、カーリングノ上被ヲ擴ゲ、ソノ上ニ左右兩方ニ、赤キ



脇息ヲ置キ、永ク美觀ヲ有シ、其處ニ彼ハ坐スルニモ適シ、臥スルニモ適ス。各  
色ノ純良ナル、多クノ飲食物ヲ供ヘラルナラバ、

無能勝、如何ガ思フヤ、其ノ王子ハ、享樂大ナリヤ。

無能勝ハ曰ヘリ。

宏大ナリ。世尊ヨ。

此處は前文を受けて居りまして、其の例證が掲げてある處です。

「クシャトリアノ灌頂王」これは五印度を征服した大帝のことを申します。「灌頂」と申すことは、卽位式のことなのですが、茲の「灌頂王」は「征服王」と云ふ程の意でございます。この王様の牢獄に、其の王子を或る罪科の廉で、入れたのでありますが、牢獄と云つても、豚小屋の様なものではございません。色々美しい裝飾物で飾られ、華が撒かれ、妙香は薫せられ、四階段、四門、圓窓、露臺等の各々備はり、臥するにも、起つにも適し、各色の純良なる飲食物さへ、供せられると云ふのであります。

世尊は「かう云ふ牢獄に入れられた、王子の享樂は、果して大であらうか」と無能勝

にお尋ねになりました。

無能勝は「世尊よ、王子の享樂は、それは廣大に違ひありません」とお答へしたのであります。

茲に「ゴニカの敷物」と云ふのがございますが、果してどんな格好の敷物であるかは、私には分りません。多分其の當時、印度で、王様の使用してゐた敷物なのでございませう。次の「ツリカノ織布」「カーリンガノ上被」も、どうも得體の知れないものです。かう云ふ名前の織布上被と思召したら、間違ひございますまい。

「永ク美觀ヲ有シ」これはこれでは私の翻譯が甚だまづらございます。他日又考へなほすことに致さうと思つて居ります。この「永く」と云ふのは、原文には *ciras* の字が使つてございます。これは *long* の義を持つて居りますから、永くと譯すより致し方がございせんが、「永く美觀を有シ」では意味をなしません。この *cira* とよく似た字で、別に *cira* と云ふ字がござります。或はこの字の書き誤りか、ひき寫しの際の、小僧の手落ではなからうかと、想像致されます。この *cira* は織物の義がありますから、



この字ですと、前後の續き合ひからしても意味をなすのであります。

(5) 王子は唯解脱を願ふのみ

世尊ハ曰ヘリ。如何ニ思フヤ無能勝ヨ、彼ハ其レヲ喜ビ安住シ、又満足ヲ感ズルヤ。無能勝曰ク、

世尊ヨ、然ラズ。實ニ又其ノ王ニ罰セラレ、牢獄ニ入レラレタル王子ハ、唯解脱ヲ願フノミナリ。貴族、王子、大臣、後宮、長者、居士、市長等、又ハ或ル變化ニヨリテ、牢獄ヨリ解脱サレン事ヲ求ム。然レドモ亦世尊ヨ、彼ノ王子ハ、牢獄内ニテ歡樂ナシ。王ガ恩惠ヲ示サヌマデハ、解脱時ナシ。

此處は世尊と無能勝との問答の續きです。

「無能勝よ、勅命に依つて投獄せられた王子は、其の獄中で喜び安住し、満足して居ることが出来るだらうか。お前一體どう思ふ」。

と世尊が無能勝に問はれました。無能勝は答へて、

「否、世尊よ、決してさうではございません。例へ享樂は大の様に見えても、王子は

内心非常に煩悶して居ります。そしてどんな方法を盡してゞも、其の牢獄から出ることをのみ心願して居ります。然し王様が恩惠をお示しになるまでは、到底出獄は出来なからうと云ふことであらう」。

と云ふことであらう。

「恩惠」原字は Prāsāda で、恩謝と同義であります。第五日の折は、これを清淨心が適切だ。と申し添へてをききましたが、其の通り此處では、これを恩惠と譯したのでございます。この「恩惠は」又「清淨心」と見ても差し支へございません。元來清淨心と云ふものは、如來から授かつたものですから、如來の恩惠です。それで清淨心即ち恩惠と云ふことが出来ます。

(6) 疑惑の諸菩薩は園林天宮の思あるも樂しみ無し

世尊ハ云ヘリ。

此クノ如ク無能勝ヨ、彼等諸菩薩ハ、疑ニ陥リテ、善根ヲ植ヘ、佛智・無着智ヲ



狐疑シ、又彼ハ佛ノ名ヲ聞ク事ニヨリテ、清淨心ノミニテ、安樂國土ニ生ル、トモ、又蓮華ニ化生シテ、結加趺坐シテ出現セズ。然モ又蓮華ノ胎内ニ生ル。如何ニ彼等ガ、園林、天宮ノ思ヒニ住シテ、便穢ナク、唾涕ナク、不快ノ心無シト雖モ、五百歳ノ間、佛ヲ見、法ヲ聞キ、菩薩ヲ見、法ヲ説ク事ヲ行ヒ、一切ノ善根ノ法ヲ行ズル事等ヲ遠離ス。如何ニ又樂シミ無ク、満足ヲ得ラレヌカヲ(見ヨ)。實ニ其ノ昔ノ(罪)ガ、消滅セル時ニ、假令ヒ外ニ出ズルトモ、上下水平何レナルカヲ知ラズ。

此處では前文の投獄せられた王子の例を引いて、如何に園林、天宮の様な思ひをして、愉快の心地の様に見えても、五百歳の長い間、佛を見、佛法を聞く等を怠つて居つたら、實際不愉快、不満足に違ひないであらう。若し又假令獄から出たからとて、全く上とも下とも見當のつかないことになつてしまふだらう。それと同じく疑に陥つて、無着の佛智を信ずることなく、假りに佛の名を聞いて、安樂國土に往生しても、自然化生して、蓮華の上に結加趺坐して出現することなく、一切の善根の福德

を失ふであらうと云ふことであります。

「清淨心ノミニテ」この「のみ」と云ふ言葉は、實に他力易行の極致を表して居ります。つまりこの「のみ」の字に依つて、完全な利益が施されるものなのでございます。この「のみ」はそれほど大切な言葉でございますが、同じ「のみ」でも蚊や蚤の「のみ」とは、格段の相違でございます。今この原字を出して御覽に入れます。

mātra

原文には mātrāra とござりまして、具格の語尾を踏んで居りますので、「のみによりに」となるのでござります。この字の根本の字義は、measure, size 等でございますが、次に moment, minutes, portion, atom, element, height, depth, breath, length, distance と云ふ様な義を出します。つまり初は寸法、それから大きさ、高さ、長さ等の意味を出して居ります。次に又 whole, totality 等の「全部」の義を出し、次に one thing and no more となり、これから nothing-but, entirely, only の義となります。これを強めると being nothing but の義となりますから、私はこれを「のみ」と讀んだ



のでありますが、この字が複合詞の末尾に附加される時は、常に「のみ」の義を出して居ります。

さてこの彼の佛の名號を聞くと云ふことのみが、即ち清淨心でございまして、名號を聞いて、信じて疑はないことに依つて、其の聞は初めて完全と云ふことが出来ます。これに反して聞くことは聞いたが、疑の度合の多いのは、聞不具足なので、つまり半信半疑の手合のことです。これは丁度碼頭に船の繋がれてゐるのを見たゞけで、吳佩孚が南京に這入つた相なと噂をする手合であります。其の事を全然信せないわけではないが、誰も實際吳佩孚に會つて、聞いた人があるわけでないから、半分は信じられなくても、後の半分は依然疑の範圍にあります。これが聞不具足なのでございします。然るにどうしてかゝる聞不具足の様なことが起るかと申しますと、元來如來と云ふものは正確であります。我々が完全に聞かぬので、かう云ふことになるのでございします。

「園林天宮ノ想ニ住ス」之は丁度電話室へでも閉ぢ籠められた様なものでございします。不潔でもなく、それだと云つて不愉快でもございしますまいが、何もすることが出

來ません。

「上下水平何レナルカヲ知ラズ」例へば子供の目を覆ふて、三回ほどそこらぐるぐる廻して、脊中をぼんと叩いて放つてやりますと、しばらくはウロ／＼して居ります。それと同じ様に、上とも下とも眞直とも、分らん様になることを申すのでございします。

(7) 一切疑惑の罪は完全なる損失をなす

見ヨ、無能勝ヨ、其ノ五百歳ノ間ニ於テハ、百千億那由他ノ佛ヲ恭禮シ、無量無邊無限ノ善根ヲ植ユル事ヲナサル可キニ、(是ヲ爲シ得ザルハ)、一切疑惑ノ罪ガ、完全ナル損失ヲナセシ事ヲ。見ヨ、無能勝ヨ、如何ニ菩薩ノ疑惑ガ、大ナル利益ヲ失フ事ニ遭遇セシカラ。

此ノ故ニ無能勝ヨ、諸菩薩ハ疑惑ヲ去リ、菩提ニ心ヲ起シ、速カニ一切有情ニ利益ト、安樂ヲ満足セシムル力ヲ得セシメン爲ニ、其ノ世尊無量光如來應正徧知ノ安樂國土ニ生レン爲ニ、善根ヲ廻向スベキ義務アリ。

此處は兎に角強い文章でございまして、仲々の名演説でございします。



「見ヨ、無能勝ヨ」まあ無能勝よ考へて御覽よ、と云ふ程の意味でございます。

此處はつまり僅か一セコンドの短時間に、無量の佛國を走り廻るを得るのではないか、それに五百歳と云つた大變長い時間だ。この一つの時間に、たつた一つの善根が、植えられない理由はない筈だ。これと云ふのも、全く一切の疑惑の罪が産んだ、完全な損失に外ならぬのである。と云ふことであります。

「ナサル可キニ」これは義務分詞でございます。この義務分詞の語尾は、*lavya* でございますが、「植」の字の終りにこれが附加せられてありますから、植えられる可きであると、其の義務なり責任なりを誓ふた形であります。この處原文には、

*avaropayitavyāni*

とあります。これが「植へらるべきに」でありまして、植へると云ふことを義務づけて居ります。義務と云ふことは、必ずやらねばなりません。他人から金を借れば、必ず返済しなければならぬ義務があります。其の責務を申すので、働かずにあつて、のらくら遊び乍ら「貧乏だ貧乏だ」と口實をつけて、返済を怠る様ではいけません。此處で

は「疑惑」と云ふ借金を、よう返済しないため、善根を植ゆることなく、利益を占めることなし、と説かれてあるのです。

「完全ナル損失」こいつはどう云ふ様な損失かと申しますと、ちよつと實例を以てお話し致します。

先年、私がこの上海から日本に渡りました時、丁度大阪にも神戸にも、コレラが流行してゐる頃で、上海が病源地となつて居りました。運悪く私の乗つてゐる船も、上海を通過して來たと云ふ理由で、神戸港の沖合である和田の岬で、三四十時間も抑留されました。抑留中も郵船會社は、相變らず御馳走を食べさせますので、その方は寔に有難うございますが、何分急用があるので、大變困りました。何時迄もこんな所に待たされて居るわけにも参りませんので、なんとか其處宜敷う云つて私だけ檢疫所まで揚げて貰ひました。そして其處の電話をかつて用事文は済ますことが出来ました。同じ損失でも、私の損失は、まあ多少有利な損失でございましたが、後の船客方はポカんと三四十時間も待たされて、大變な損をしたのであります。これらが本當の損失で



ござります。

「廻向スベキ義務アリ」又最後に義務ありとしたのでございます。即ち菩薩と云ふものは、菩提に心を起し、一切の有情を濟度するの力が入用である。それには「疑惑」を去り、安樂國土に生れんため、善根を廻向すべきものである。と義務づけたものであります。

この四十一章の全體は、信疑決判と申しまして、この經の中で、非常に大切なところなのでございます。「今日の様な有様では、明日の日が分らんが、まあ其の内どうにかなるだらう」と云ふやうに疑つてゐると、結局はろくなことにはなりません。「如來の名を聞いたから、行けることは行けるんだらうが」と疑惑の雲に覆れて居りますと、應て大なる利益を得損ふてしまひます。それでこの信疑の決判と云つて八釜敷く論じたものなのでございます。

#### 第四十二章 十方諸國の往生者

(1) この佛國よりの往生者

是ノ如ク説カレシ時ニ、無能勝菩薩ハ、世尊ニ言ヘリ。

世尊ヨ、如何ニ多クノ菩薩ガ、此ノ佛國ヨリ出デ行キ、亦他ノ佛世尊 現前ヨリ、安樂世界ニ生レントスルヤ。

世尊ハ曰ヘリ。

實ニ無能勝ヨ、此ノ佛國ヨリ七十二億那由他ノ諸菩薩ガ、出デ行キテ、安樂世界ニ生レ、不退轉ニ(進ム)。彼等ハ多クノ百億那由他ノ佛(ノ所ニ於テ)、善根ヲ植ヘ(シモノナリ)。小善根ノ者ハ、何ゾ言フ事ヲ要センヤ。

此處は大分話が變つて來て居ります。

「此の佛國から出て行つて、彼の安樂世界に行つたものが誰かありますか」と無能勝が世尊にお尋ね致しました。

世尊は答へられて、

「觀音や勢至菩薩等は、既に行つたのであるが、この外に七十二億那由他の菩薩が安



樂世界に往生し、何れも不退轉の位に住する。これ等は皆大善根のものであつて、小善根の手合は論の内に入らぬのである。」

と申されました。

「小善根」我宗祖は、これを疑を抱けるもの、即ち正しい信を得てをらぬ者だ。と言つてをられます。

「言フ事ヲ要センヤ」サンガバルマンは、これを不可稱計と譯してをります。つまり言ふことが出来ないと言ふことであります。

(2) 難忍如來乃至神通力如來國の往生者

- 一、難忍如來ノ所ヨリ、十八億那由他ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
- 二、又東方ニ住メル寶藏如來ノ所ヨリ、九十億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
- 三、星光如來ノ所ヨリ、二十二億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
- 四、無量光明如來ノ所ヨリ、二十五億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
- 五、世燈如來ノ所ヨリ、六十億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。

- 六、伏龍如來ノ所ヨリ、六十四億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
  - 七、離塵光明如來ノ所ヨリ、二十五億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
  - 八、獅子如來ノ所ヨリ、十六億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。  
(獅子)如來ノ所ヨリ、一萬八千ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
  - 九、吉祥如來ノ所ヨリ、八萬一千ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
  - 十、人王如來ノ所ヨリ、十億那由他ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
  - 十一、神通力如來ノ所ヨリ、一萬二千ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。
- 難忍如來以下各々の如來名を擧げ、其處から安樂世界に往生する菩薩の數が列記してございます。何れにも皆「往生せん」と未來語基が使つてございます。それで七十二億那由他の菩薩と云ふのも、どうも未來にかゝつて居るものらしいと思はれます。そうすると我々もどうもこの七十二億那由他の中に這入るらしいと思はれます。競馬の馬券を買つて、廿五萬圓夢見てゐるよりは、大分確かでございます。今この原字を出してご覧に入れますと、 upapatsyante



このSyaと云ふのが、未來の語尾でございますして、現在を云ふのでなく、過去を云ふのでなく、未來のことにかゝるものなのでありますから、釋迦世尊說法後の末世にかゝるものでございます。

(一)から(十一)まで、みな讀んで字の通りでございます。即ち如來名と往生する菩薩衆の數量とを云つたものでございますが、(八)は獅子如來云々と、同一の如來名が掲げられてありますが、これは私の所持致す二つの原本が、何れも其の數量を異に致しますので、参考のため二つ擧げてをきました。

(3) 花幢如來國の往生者

十二、(花幢)如來ノ所ヨリ、二十五億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。彼等ハ大精進ニ到達シ、一度進メバ、八日ニ於テ、新ニ九十億那由他百千劫ノ時間ニナサルベキコトヲ、面前ニ行フモノナリ。

これは中々面白いことが書いてあります。

花幢如來の所から往生すると云ふ二十五億の菩薩は、非常に大勉強な先生で、九十

億那由他百千劫の間にせられることを、僅か八日間をやつてしまふと云ふ、大勉強家なのでございます。この八日間と云ふのは、昔印度で使つた一週間のことを云ふのであります。那由他は億の二乗、その九十倍と、其の上に百千をかけたものが九十億那由他百千、一劫を四十三億二千萬年として九十億那由他百千倍の劫です。その長い劫を費して出来る仕事を、僅か八日間をやつてのけるのですから、此處らの會社銀行でも一人こんな人を雇つておけば大丈夫です。少々社員のサボタージュを受けても、一向影響致さぬであります。

(4) 火王如來國の往生者

十三、火王如來ノ所ヨリ、十二億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ往生セン。

これは讀んで字の通りであります。

(5) 到無畏如來國の往生者

十四、到無畏如來ノ所ヨリ、六十九億ノ菩薩ガ、安樂世界ニ生レ、無量光如來ニ謁見シテ、恭禮シテ、尋問ヲ爲サン。無能勝ヨ、一億那由他劫ノ間ノ全部ヲ以テ



スルモ、無量光如來ニ謁見シ、恭禮シ、奉仕センガ爲メ、安樂世界ニ來ル所ノ諸菩薩ノ(國ノ)、如來ノ名ヲ説カントスルモ、限極ニ達セザルベシ。

これは全部をひつくるめて、以上の様に無量光如來に謁見し、恭禮し、奉仕せんがためにくる菩薩の、其の國の如來の名を、一億那由他劫の長い時間を費して説いても、仲々云ひ盡せるものではないと、云ふたものであります。

これにて正宗分の結論がついたのでございます。即ち安樂國に生れるには無量光如來の名を聞いて、易く生れることが出来るのであります。然らば何人が生れるのであるかと云ふと、斯やういふものが生れるのであると云ふので、所謂結論がついたのでございます。

これから後の章は流通分になつて居ります。流通分に就いては、第一日に申し上げました様に、この經典に於ける結論なのでございます。何故この流通分が必要であるかと申しますると、佛の説法を、末代衆生に廣く普く知らしめねばなりません。たゞ説いただけで、放つておいたのでは、何の役にも立ちません。其の流通と云ふことが、

最も大切なことなのでございます。これから後は一字々々緊要でございませうから、其のお積りで讀んで戴きませうといけません。

### 三、流通分

#### 第四十三章 釋迦世尊無能勝にこの法門を付屬す

(1) 如來の名を聞くより容易に大利を得

見ヨ、無能勝ヨ、如何ニ容易ニ大利ヲ得タル事ヲ。彼等諸有情ハ、無量光如來ノ名ヲ聞ク事ニヨリテ、少クモ一念清淨心ニテ、彼ノ如來ノ説ト、又此ノ法門ニ於テ、彼等有情ハ、劣等ナル信解ヲ有スル者ニ非ズ。無能勝ヨ、彼(如來)ヨリ、此ノ時ニ於テ、(此ノ法門)ヲ顯揚シ、領解ニ導キ、諸ノ天人ノ世界ノ前ニ、此ノ法門ヲ聞カシムル爲、三千大千世界ニ火ガ滿ツルトモ、深ク入りテ、中ヲ超ヘテ、一念タリトモ、退却スル心ヲ起ス可カラズ。

「容易ニ大利ヲ得」と云ふのは、容易に利益を得ると云ふのと同じことでありませう。



これに就いては昨日詳しく申し上げましたが、要するに何等のからくりもなく、たやすく利益を占めることなのでございます。これはつまり信じて疑はぬからで、無量光如來の名を聞くと共に、其の無着の佛智に相應するからであります。

それで容易に大利を得ると云ふのは、疑ふやつではない、信ずるもの、ことでもあります。例へばあの紙幣です。あれは唯だの紙であつて、紙其ものには決してそれだけの價値はございません。我々はこの價値のないものを、價値あるものとして信じて使つて居るのでございますが、それは其れに相當するだけの金が、日本銀行にちやんと藏めてあるからで、紙幣をさへ日本銀行に持つて行きますると、何時なりと、それに相當する金を呉れます。而しこの紙幣を、兌換條例の第何章云々に據つて、これだからと云つて、研究しながら使つて居る人は、銀行家はいざ知らず、他の殆んど全部の者には、恐らくございませぬことせう。かやうに多くの人は、唯だ之を信じて使用して居るのでございますが、これなどは寔に劣等な信解でございませぬ。而しこの信じて使つて居る人は、六ヶ敷い原理を知つて居るものと、結局同一の利を受けるこ

と、なり、高級な信解を有する人と、同じく大利を得て居るのでございます。

「此ノ時ニ於テ此ノ法門ヲ顯揚シ」は實に強い言葉が使つてございませぬ。

「一念タリトモ」これに就いては、度々申し上げましたが、一念と云ふのは、元來心のことでありませぬ。而し又同時に時間の極促を示したものでございませぬ。此處はつまり三千大千世界が、火になつても行け、一念たりとも、決して退却する心を起してはいけないのだ。と云つてあるのであります。この「起ス可カラズ」と云ふのは、前と同じ様に、TAVYA の義務分詞が使つてございませぬ。此處らは實に溢れる様な勇氣の躍動を思はしめます。

(2) この法門を開示宣説し書寫執持し諸有情を不退轉に安住

せしむる義務

其レハ何故ナルヤ。無能勝ヨ、一億ノ菩薩ガ、此ノ如キ法門ヲ聞カザルニヨリ、無上正徧知ヨリ退轉セリ。彼レヨリ此ノ法門ノ深信ニヨリテ、聞キテ、執持シ、利益ヲ得ルニ於テ、義理ヲ廣ク開示宣説スベシ。又甚ダ大ナル精進力ヲ起スベシ。







て、無量無數の有情を無上正徧知から退轉しない様に、安住せしめる様願ふところの義務があるのだ。そして自分自身も、殊勝なる佛國の功德嚴飾莊嚴成就具足を攝受する」と云ふことでありまして、彼の普賢行にも應へて來て居ります。

扱て今迄の正宗分の所では、唯だ信じて疑ふてはいけなとありました。處が今度この流通分に這入りますると、自分が唯だ信じて疑はぬばかりでなく、他人をも共に信せしめると云ふことに就いて、説かれてありまして、開示宣説と云ふことにあるのでございます。我々も亦、この責任を負されて居るのでありますから、こうやつて經典の御講義を申し上げて居る様な次第で、一つに「開示宣説」とお示しなされた義務のためであります。

(2) 未來の時に於てこの廣大法門により絶大の利益を得

復次ニ無能勝ヨ、絶大ニ容易ニ利益ヲ得タル事ヲ。彼等諸有情ハ、善根ヲ植ヘ、昔ノ勝者ニ奉仕ヲ爲シ、又佛ノ加威力モ得ルナル可シ。其ノ彼等ハ、未來ノ時ニ於テ、其ノ正法ガ滅盡流轉ノ時ニ於テ、是ノ如キ廣大ナル法門、即チ一切諸佛ノ證誠

シ、一切諸佛ノ稱讚シ、一切諸佛ノ悅可シ、廣大ナル一切智智ノ、速ニ耳ニ明瞭ニ來ル事ヲ得ルナル可シ。

「絶大ニ容易ニ利益」これは原文には atyārtha sulābha labhās とあります。atyārtha と云ふ字が絶大と云ふ字義を持つて居りますが、英國の「キシコグラハ」は、これを多の義に致して居ります。印度では、これを absolute (絶對) として居ります。文字のまゝならば、義理を超越したといふ事でありませぬ。絶大でも絶對でも、意味は同じことであるが、文章としては絶大と致します方が、宜敷うございますので、これを絶大としたのであります。

この絶大に容易に利益を得ると申しますことは、つまり一文の資本なくして、容易に利益を得ると云ふことであります。買った馬券が、運よくあたつて、二十五萬弗を握つたからと云つても、それには幾らかの掛け金をしてゐることですから、絶大に容易に利益を得るとは申されませぬ。而しこの無上正徧知を得るのには、唯聞くと云ふことのみで、何等の資本金なくして、一念清淨心に依つて、容易に利益を得るのであ



りますから、これこそ本當の絶大の利益であります。今迄は容易に利益を得ると云ふ字を用ひて來ましたが、茲では、特に絶大の文字を用ひて、容易なることを示されました。

「佛ノ加威力モ得ルナルベシ」の得るなるべしは、未來法が用ひてございます。即ち原文には bhavisyanti とございますから、佛の威力は未來にも蒙るのであります。私等の居る時代ばかりに、限られたのではないことを、表はされてゐます。

「證誠」これは保證のことです。

「一切智々」原字を sarvajña と申します。つまり一切智のことです。原文には sarvajña-jñānasya とありますので、一切智々と譯しました。菩提流志も亦かやうに譯して居ります。

此處は要するに、今、自分（世尊のこと）は、この世に出て來て居るが、唯だ自分が存在する時のみでなくして、未來何時々々々でも、例令ばこの正法が、滅盡流轉する様な時があつても、一切の諸佛が證誠し、一切の諸佛が稱讚し、一切諸佛が悦可する

る、この廣大なる法門を、明瞭に聞くことが出來やうと、云ふことなのでございます。

(4) 讀誦し誦念し學習し開示し書寫供養によりて功德を増上す

彼等ハ聞キツツ、廣大ナル歡喜ニ滿タサレ、説カル可ク、受持セラル可ク、讀誦セラル可ク、誦念セラル可ク、學習セラル可ク、他人ニ廣ク開示セラル可ク、又修習ニ満足スベク、少ナクモ書寫シツツ、供養スル事ヲ得ルナラバ、彼等ハ又多クノ功德ヲ増上スベキ事、容易ニ計算ヲナシ難シ。

この文はまづ讀んで字の通りであります。

「歡喜ニ滿サル可ク」と云ふことは、非常に喜ぶであらう。と云ふ意味であります。

「誦念」唯だ念ずるのみでなく、そらんずることです。

「修習」自分で自ら勉強することです。次に書寫の字がござります。何故か度度出てくるのであるかと申しますと、すべて其の流通を全からしめるには、どうしてもこの書寫と云ふことに依らねばなりません。それで前にも僅か牛乳を搾る間でも、書卷の少片なりとも、書寫執持せよと説れてあつた所以でございます。



終りに「容易ニ計算ヲナシ難シ」と云ふのがございます。これはつまり計算すると云ふことが、容易でないと言ふ意味でございます。

(5) 如來の成すべきは成し終る

ト云ヒテ、誠ニ無能勝ヨ、其ノ如來ニ於テ、爲サルベキ事ハ、我ニヨリテモ、成シ終レリ。汝等ニヨリテ、今無疑ニヨリテ、修習ヲナスベキ義務アリ。

初めに「ト云ヒテ」とございますが、この字は、實に一結萬鈞の力ある大切な言葉であります。原字を 𑖀 と申しますが、この字は常に一文の末尾に来るので、「と云ひて」と譯すのが普通であります。處がこの文では、𑖀 が、文の頭初に來て居ります。これはどう云ふ譯であるかと申しますと、第一日目の處で、阿難陀が世尊に對して、發問したところがありました。あれから以後これまで説れたことを、全部を一括したところの 𑖀 なのであります。

若しこれがこの文の最後に着いて居る様でしたら、たゞこの文のみに關係するのであります。それでこの 𑖀 が、文の前に來ると、後につくとは、大變な相違があるので

でございます。

「如來ニヨリテ爲サルベキコトハ、我ニヨリテモ成シ終レリ」これが仲々強い文字であります。一つ原字を出して御覽に入れます。

Tathāgata

Kartavyam

Kīṭam

tan

mayā

如來 に依りて 作するべき義務を 爲し終れり 我に依りて

原文の通り譯したのでは、日本文になりませんから、私が日本文に轉應させたものであります。何故この字は、強い意味の字であるかと申しますと、最初阿難陀が問をなして、「今日世尊は過現未の三世諸佛を憶念なされたのですか」とお問ひ申し上げて居りますが、これは即ちあれに應じたものだからであります。

此處でちよつと注意を要しますことは、tathāgata の尻に、ana の語尾が附いてゐることです。この語尾は、單數具格の語尾變化でございますから、三世十方一つ一つの如來に依つて、なされてゐることを表はして居ります。若し此處に、複數の語尾が使つてございましたなら、果して十人の如來を云ふのか、百人の如來を云ふのか



か分りません。而しこの單數なることによつて、一々の如來の義務なることが明かになされて居ります。それで自分も如來である以上、其の如來の一人として、如來のなすべき義務を果さねばならない。それで此處に全く其の如來としての義務が、果されたわけでございます。

扱てこの如來の義務は濟んだのであるが、今度は無能勝以下の我々に疑ふてはいけないと云ふ、義務を附せられました。「無疑ニヨリテ修習ヲナスベキ義務アリ」と云ふ最後の一文がそれでございます。

(6) 佛法を滅没せしめざらん爲め修習し成就せよ

無着無礙ノ佛智ヲ疑フ無カレ。一切種々ノ寶ヲ以ツテ作ラレタル、牢獄ニ入ラ(シム)ル勿レ。實ニ無能勝ヨ、佛ノ出世ニ遇ヒ難ク、法ノ教示ニ遇ヒ難ク、機會ノ遭遇ヲ得難シ。又無能勝ヨ、我ニヨリテ、一切ノ善根ノ彼岸ニ到達スル事ヲ説カレタリ。汝等ハ、今修習シ、成就セヨ。又實ニ無能勝ヨ、此ノ法門ノ大付屬ヲ爲ス。佛法ヲ滅没セシメザランガ爲ニ、努力スベシ。如來ノ勅命破壊スル事勿レ。

此處は今まで説れたことを、ひつくるめて居ります。

「決して無着礙の佛智を疑ふ様のことがあつてはならない。例へ種々の寶をもつて飾られてあつても、そう云ふ牢獄には這入つてはいけないぞ」無能勝よ、自分は今、一切の善根の彼岸に到達する法を説いてやつた。お前等は集つて、この法門の大付屬を行はねばならない。そして決して如來の勅命を、破壊する様なことがあつてはならない」と結ばれてあります。

茲でちよつと付屬文のことに就いて申し上げます。少し學問的に涉りますが、この經典の付屬文と云ふのは、第何章位からと申し上げますと、四十三章位からが、付屬文になつて居ります。而し正確なことは(5)の「如來ニ於テ爲サルベキコトハ云々」の所から以下が、眞の付屬文なのでございます。それでも一般的廣義の上からは、矢張四十三章の初からと云ふことになつて居ります。我が宗祖も亦かやうに申してゐます。次に「大付屬ヲナス」とありますが、これは原字を

mahatim parindana

流通分



と申します。Parindana には、gratification, present と云ふ意味がございます。即ち喜悅とか、贈り物とかの意味であります。此處らが西洋人のうまく讀んで居らない處で、付屬と云ふ様な義は、何處からも出てくれません。それでこれを付屬と讀むにつきましては、私も非常な苦心を致しました。幸に能斷金剛般若經の中で、玄奘三藏が、これを付屬と讀んでをります。玄藏三藏以外の譯者も、多分付屬と讀んで居るだらうと思ひますから、私もこれを付屬と譯しました。この義は、極く手早く申しますと、「事務引き繼ぎ」のことであります。此處らの會社銀行あたりでも、支店長がお代りになりますと、新任支店長が、其の舊支店長の事務をお引き繼ぎになります。そう云ふことを付屬と申しますが、これが仲々大切なことでありますから、大の字を附して、大付屬と申したのでございます。

「佛ノ出世ニ遇ヒ難ク、法ノ教示ニ遇ヒ難ク、機會ノ遭遇ヲ得難シ」この中で、終りの機會の遭遇を得難し、と申しますのは、此の場合は、人間に生れる機會の、得難きを申すのでございます。即ち、人身の得難きを云つたもので、機會は原字を、*Isana*

と申しまして、瞬間とか或は刹那とかの義なのであります。

「我ニ依リテ一切ノ善根ノ彼岸ニ到達スルコトヲ説レタリ」と云ふのは、つまり一切の善根の終極まで、説き終つたと云ふ意味でございます。「我ニヨリテ説レタリ」と云ふと、如何にも持つて廻つた様に思はれますが、丁度初めの如是我聞と、同じ書き振りで、直譯の方が、却つて面白いために、かやうに致しました。最後の「如來ノ勅命破壊スル勿レ」と云ふのは、仲々強い勢のある文字であります。これと云ふのも無能勝は、其の後繼者だからであります。

#### 第四十四章 無着無礙の佛智を信心し精進せよ

(1) 世尊偈陀を説く

其ノ時佛世尊ハ、又ガータヲ説ケリ。

佛世尊ガ、また偈陀を説いたのであります。

(2) 一、勇者はこの法を聞くことを得



福德ヲオサメザルモノハ、我ノ法ヲ聞ク能ハザル可シ。勇者ニシテ、義理ヲ成就セルモノハ、此ノ法ヲ聞ク事ヲ得。

自分の法を聞くことの出来ない者は、金がなくて貧乏して、困つて居るからと云ふわけではない。福德のない者は駄目なのであつて、義理を成就して居るところの勇者は、聞くことを得るのである。と云ふことであります。

(3) 二、光明を作る者を見ることを得

又實ニ其等ニヨリテ、正徧知世尊ノ光明ヲ作ル者ヲ見ル事ヲ得。威神ニヨリテ、法ヲ聞ク彼等ハ、最大ノ歡喜ヲ満足スベシ。

此處で「威神ニヨリテ法ヲ聞ク」と云ふのは、如來の威神に依つて、法を聞くと云ふことでもあります。

(4) 三、懈怠邪見者は清淨心無し

下劣ナル者、懈怠邪見ノ者ハ、佛ノ法ニ於テ、清淨心ヲ得ル事無シ。彼等ハ、佛ヲ往昔ニ於テ、恭禮供養セシ(モノニシテ)、彼等ハ、世尊ノ行ニ於テ學ベリ。

「下劣」と申しますのは、無智下等な者のことでもあります。

「懈怠」は惰け者のことでありまして、「邪見」と云ふのは、間違つた見解を申します。この見解は、原字を *Right* と申します。この字には、邪の義はございません。然し *Right* で否定してありますから、邪見となるので、佛教と異つた見解を持つてをるもの、ことを申します。

(5) 四、一切有情は佛智を知らず

盲目ノ男ガ、暗黒ニ於テ、道ヲ知ラズニ、如何ナル方向ヲ、指示スル事ヲ得ンヤ。一切此クノ如ク聲聞ガ、佛智ニ於テ知ラズ、況ヤ又更ニ(他ノ)有情ヲヤ。

この偈はつまり佛智の宏大を云つたもので、盲人が、くら闇の中を行くのに、道を知らずに、何時までもさまやうてゐると同様に、佛の説法を直接に聞いた弟子ですら、知ることの出来ない佛智を、どうして一切の有情が知り分けることが出来やう。と云ふのでござります。

(6) 五、佛は實に佛の功德を知る



佛ハ實ニ佛ノ功德ヲ知ル。天龍、阿修羅、夜叉、聲聞(等ハ知ル事)ナシ。獨覺道ヲ行クモ、佛智ニ於テ、誠ニ知見スル事ナシ。

要するに佛の功德は佛自身のみより知らんだ。他の天龍、阿修羅等の知るところではないんだ。と云ふことであります。

(7) 六、佛の功德は説く能はず

若シ一切有情ガ、等シク極清淨智第一義諦ニ通達シ能フトモ、彼等ハ、一億劫其レヨリモ更ニ以上ニ於テモ、一ツノ佛ノ功德ヲ説キ能ハズ。

この偈は讀んで字の通りでございます。

(8) 七、勝者の智は不可思議なり

其ノ時ノ中間ニ於テ、滅度ニ入りテ、多クノ億ノ劫(ノ間)宣説シ能フトモ、又佛智ノ限量ニ到達セズ。是ノ如ク實ニ勝者ノ智ハ、不可思議ナリ。

この偈は如來の智の不可思議なることを云つたものであります。つまり、幾億とも計れない澤山の劫の間、宣説したりとて、中々佛智は *inimitable* せられないと云ふことで

あります。

(9) 八、博聞智者は信心す

此ノ故ニ、博聞諸智ヲ有スル人ハ、我が説ヲ信心シ能フ可シ。

勝者ノ智ノ集蘊ニ、全ク通曉スル(モノハ)、佛ハ知レリト、稱讚ノ言ヲ説ベリ。

「博聞」これは明達の義をも含んで居りますが、又學者の義もあります。

茲の信心の信は、疑に對する時の信でございます。

「佛ハ知レリ」この知れりは、*prajna* の知ではなくして、*prajna* の智の方が宜敷うござりますから、さう致します。

この偈は要するに、如來の説を信せんものは、大馬鹿者で、如來の深い智慧を知つて、これを信ずる者は、稱讚すべきものである。と云ふことであります。

(10) 九、信心の義理の智慧は長時間

或ル時ニハ、人身ヲ得、或ル時ハ、佛ノ出現(ニ遭フ事アリ)トモ、信心ノ義理ノ智慧ハ、長時間(ヲ經タル後)ニ於テ得可シ。



其ノ義理ヲ得ントスル者ハ、精進ヲ起ス可シ。

「或ル時ニハ、人身ヲ得、或ル時ハ佛ノ出現ニ遭フ」と云ふのは、前の機會の遭遇の意味を出して居ります。この或る時と云ふことは、稀の義でございまして、終の長時間を経たりと云ふのは、今迄、即ち信心を得るまでに、長時間かゝつたと云ふ意味で、これから先長時間かゝると云ふのではございません。

(11) 十、最勝の法を聞いて歡喜憶念す

此クノ如ク、最勝ノ法ヲ聞キツ、歡喜ヲ得テ善逝ニ於テ憶念ス。

彼等ハ、我等ノ過去ノ時ノ信友ニシテ、彼等ハ佛菩提ニ願ヲ起ス。

茲にも善逝と云ふ字が出て居りますが、度々申します如く、佛のことでございまして、次の「我等」は如來を云つたものであります。

#### 第四十五章 得 益 分

(1) 得 益 の 有 情

復次ニ法門ヲ説カレシ時、十二那由他億ノ有情ガ、塵ヲ離レ、垢ヲ去リ、法ニ於テ、法眼極メテ清淨ナリ。

二十四億那由他百ノ有情、阿那含果ヲ得タリ。

八百ノ比丘ガ、無執ニシテ、諸漏ヨリ心解脱シ、二十五億ノ菩薩等ハ、無生法忍ヲ獲得シ、四十億那由他千ノ天ト人トハ、會ツテ無上正徧知ニ心ヲ起ササル(者ニシテ、今)世尊無量光如來ニ謁見ヲ願フ爲、安樂國土ニ生レン事ヲ願ヒ、又諸善根ヲ起ス。一切彼等ハ、生レテ(後)、次第ニ妙音ト名付クル如來(トナリテ)、他方ノ世界ニ於テ、生ルベシ。八十億那由他ノ(有情)ハ、然燈如來ニ於テ、忍ヲ得、無上正徧知ヨリ不退轉(ナルモノニシテ)、無量壽如來ニヨリテ、會ツテ菩薩行ヲ行ヒシ時ニ、成熟セラレシ(モノニシテ)、彼等ハ、又安樂世界ニ於テ生レ、

昔ノ本願ノ行ヲ、皆盡ク完全ニ満足スル事ヲ得ベシ。

こゝは流通分の中でも、得益分に這入るものでございます。今までは釋迦世尊の説法遊されたもので、これでこの經典は終つたわけでありましたが、其の説法を聞いて居



つた聽衆が、受けた利益は幾何であつたかと云ふのが、最後の問題であります。つまりこの章は、その利益を得た具合が述べてあるところで、即ち得益分として、存在致す所以なのでございます。

茲で「阿那含果」と申しますのは、小乗の悟りでございます。二十四億那由他億の有情が、悟を得たと云ふのでございます。

妙音と云ふ如來は、普賢行をする如來であります。

#### 第四十六章 現

瑞

(1) 六種に震動し神變現れ大地は莊嚴す

斯クノ如ク説カレシ時、三千大千世界ガ、六種ノ方向ニ震動シ、各色ノ神變ガ現レテ、大地ハ莊嚴セラレ、(散華ニテ)、天ト人トノ種々ノ妙音樂ガ奏セラレタリ。其ノ歡喜ノ聲ハ、アカニシユトハノ天迄響ケリ。

これはつまり釋迦世尊が説法し終られた時、三千大千世界が、神變不可思議の形相

となつたと云ふことであります。

#### 第四十七章 大衆同喜

(1) 諸菩薩諸聲聞等世尊の所説を歡喜す

此クノ如ク説カレシ時、世尊ハ、心ヲ得タリ(満足ノ義)。無能勝菩薩大士、具壽阿難陀又彼等聲聞ノ大衆、天ト、人ト、アスラ、ガンダルバ、又世界ハ、世尊ガ

説カレシ所ヲ歡喜セリ、ト云フ。世尊ガ満足せられ、無能勝、阿難陀、其の他の聲聞大衆、天世界等が、世尊の御説

法に對し、歡喜したと云ふことであります。

(2) 經 題

世尊無量光如來功德稱讚諸菩薩不退轉地ニ入ル。無量光莊嚴圓滿安樂莊嚴滿足ト

言フ、吉祥無量光如來ノ安樂莊嚴ト(名ヅクル)大乘經終リ。

これはこの經の題名でございます。(大正十四年上海に於て講話)

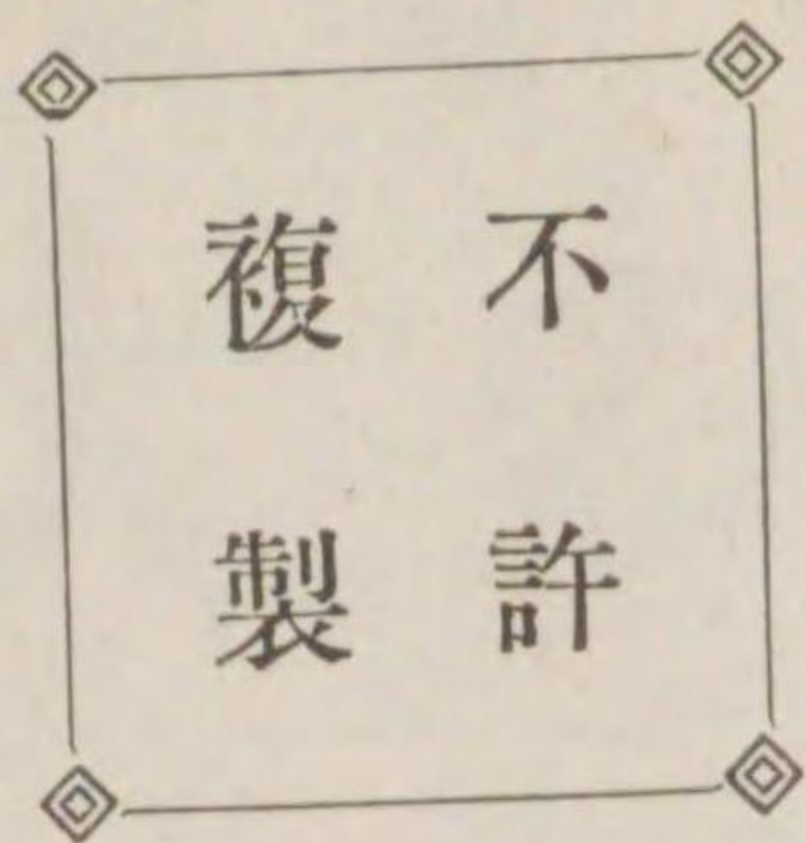


無量光如來安樂莊嚴經終

昭和五年十月五日印刷  
昭和五年十月八日發行

無量光如來安樂莊嚴經講話與附

定價金貳圓



述者 大谷光瑞  
發行者 柱本瑞俊  
印刷者 渡邊安雄  
印刷所 民友社印刷所

東京市京橋區築地三丁目十六番地

發行所

大乘社東京支部

(振替口座東京二一番)



# 新刊 大谷光瑞師述 佛敎の大意

全卷要目

第 六	第 五	第 四	第 三	第 二	第 一
解經 典略 深密 經意	廣信 煩惱 即相 入	佛世 俗諦 一義 生諦	佛世 俗諦 一義 生諦	佛世 俗諦 一義 生諦	佛世 俗諦 一義 生諦

第 十	第 九	第 八	第 七	第 六	第 五	第 四	第 三	第 二	第 一
結論	量壽	無量壽	大般涅槃經	大般涅槃經	大般涅槃經	大般涅槃經	大般涅槃經	大般涅槃經	大般涅槃經

佛敎は近代科學文明と、如何なる關係の上に、如何なる特異性を持つか。引いて人生指導の立前は、如何なる原理の機能にあるか。本書は最新學說に準據して、佛敎の根本立脚點に、確乎不動の妥當性を検討し、佛陀力説の代表的經典の梗概を講述して、語源的基礎の上に、其處に内含せられたる、佛陀秘奥の中心觀念を闡明して、佛敎の新しい意義を價值とを附與した。適切なる例證と、平易なる釋明によつて、何人も一讀了悟せしめる底の、佛敎新解釋書であり、一面絶好の佛敎入門書である。

附録 額面用著者眞筆  
「應信如實言」

縦一尺七分横二尺  
木版彫刻、日本墨手刷  
用紙最上支那紙  
四六版二〇〇頁  
定價拾圓  
送料拾錢



最新刊忽ち第三拾版  
大谷光瑞師著  
國民之自覺

著者は前著「帝國之前途」を以て經とし、新著「國民之自覺」を以て緯とし、八千萬の同胞悉く兩者を綜合併讀し、其の實踐躬行により、我國力の發展、國富の増進を期し、又一家の繁榮、生活の安定を得て、世界無比の皇恩に報せん事を希ふ赤心より本書を公にせり。冀くば諸賢の座右に一部を備へられんことを。

—(内容目次)—

- 一、我が民族の地位
- 二、所謂國難來と思想善導
- 三、食糧問題
- 四、衣服問題
- 五、住宅問題
- 六、生活の安定
- 七、節約
- 八、勤勉、能率増進
- 九、大資本と小資本
- 一〇、不景氣と其の原因
- 一一、修養と教育
- 一二、富に對する新舊の思想
- 一三、富の利用法
- 一四、謝恩の生活
- 一五、我邦の婦女
- 一六、産兒制限
- 一七、政黨論
- 一八、結論

菊判百六十頁  
定價 六拾錢  
送料金六錢

第九十版  
天覽大谷光瑞師著  
帝國之前途

卷頭序文著者眞筆版

時難は刻々全國民の上に急迫し來れり。われ等如何にしてこの難局を打開すべき乎。政治家よ、學者よ、實業家よ、すべて同胞よ、今は徒らに空論を闘すの時にあらず。實業家よ、すべて熱血を以て導者たり、實行者たる巨人、大谷光瑞先生は、一代の先覺者たるが如く、一たび大光明を指示す。國家の興隆、個人の人々の成功は、諸君の目前に在るを知らずや。

—(要目)—

- 一、我が帝國の地位(米、英、佛、伊、獨の地位と、帝國との比較)
- 二、我が國民の缺陷(勤勉なる外人、日本人の政治的盲目、對商上の不眞摯)
- 三、就職難(教育の誤、入學難、中學全廢論、俸給生活者の危險、自活と家畜生活、都會集中)
- 四、思想の險惡(根本策、米價半減論、生活費低下)
- 五、生活安定に對する積極策(危險思想、奢侈、不安と不平)
- 六、生活安定に對する積極策(蠶業問題、木材、自動車、ゴム、鐵、石油)
- 七、化學工業の問題(原料と國民性、電力問題)
- 八、水産業
- 九、現代青年の無氣力(原因、療法、青年の私奔)
- 一〇、歐米崇拜
- 一一、壯年の名と老年の財
- 一二、直接行動
- 一三、人口問題(移民の適不適、海外事情、無産渡航)
- 一四、我が外交
- 一五、結論

菊判百六十頁  
定價 六拾錢  
送料金六錢



# 大谷光瑞師著

大乘社發行

## 四版 觀世音菩薩

四六版並製寫真版挿入  
定價 壹圓 送料 六錢

觀世音菩薩の御名は我々佛教徒にとつて欣仰すること久しきものである。然るに凡俗の徒はその來歴、由來を詳知するもの又稀である。甚しきは菩薩をして女人であるとなし、その説も亦區々、今此處に大谷光瑞師は大方の熱誠なる憑證により、梵、英、漢、和の諸經を參照引例して本稿の述成る。師の科學的なる佛典解説は既に定評ある所、宜しく諸賢の御細讀を俟つ。

## 十版 見眞大師

菊判上製四百頁  
定價 參圓 送料 拾錢

本書は本社々長の一大論文にして、堂々十三萬言、直ちに大聖親鸞上人の本旨を宣説して遺憾なし。今や百世の群生昏自ら閉して長く不測の深淵に墮せんとす。是れ寔に憐むべし。讀者能く本書に依りて大聖の眞面目を知り、併せて本願圓頓一乘の妙法に達するを得ん乎。

## 極樂莊嚴

四六判箱入天金 定價 貳圓  
總クローズ製 送料 八錢

親鸞上人の胸中燦たる光明に満ちた極樂の莊嚴は、もはや宗教、哲學、道德の世界に逐はれ、科學の世界はその光を奪ひ、時代はこれを葬らんとしてある。こゝに於て社長は科學は如來の世界に於て始めて儼存するものなる事を宣し、現代人に甘露の法雨を澍いてゐる。眞摯なる讀者を俟つ。

## 八版 佛說阿彌陀經講話

四六判 定價 壹圓 送料 六錢

近代のわが佛教聖典中最も普及されたのは此の阿彌陀經である。西方淨土の本願は正に此の經典より流出してゐる。本書は近代の俊學、大谷光瑞親下の註釋本にして、その博學なる、その鄭重なる實に手をとつて親しく教へを受くるの感がある。苟くも阿彌陀經を稱ふる者の必ず手にすべき書である。

## 四十版 般若波羅密多心經講話

四六判 定價 七拾五錢 送料 四錢

世に般若波羅密多心經を講ぜしもの決して少なしとせず。而して本書が他に卓絶せる所以は、直ちに印度の原書に依憑し、社長が該博の蘊蓄を傾倒し、その梗要を平明に譯述せられたるにあり。蓋し本書に於ては一々の語源に就て文法上より解義せられたるものなりとす。

## 賜台覽 第一義諦

四六判美本 定價 壹圓貳拾錢 送料 六錢

絶對他力の平易簡明なる科學的解説は先人未踏の境地として眞に一世の大獅子吼、千歳不朽の名著なり。天下求法の士請ふ之に依りて悟道の彼岸に到達せんことを。

## 十版 佛教の原理

四六判クローズ裝美本 定價 貳圓 送料 特八錢  
並製 定價 壹圓五拾錢 並六錢

佛教は今の人に解らないのではない。科學的の頭をもつた今の人々の方がよく解る。それに佛教は何が現代人とは無關係のやうに考へて居るから此書が出て居るのである。この本を讀んで見れば、過去も現在も未來も誰一人として、また何一つとして没交渉であり得るもので無いといふことが判る。



# 佛教の要諦

送定菊 料價半 截 四七 拾紙 錢錢裝

内容  
一、眞如 佛教は宗教に非らず——物質と精神——一切皆空  
二、實相 萬物悉く變化——智慧——因縁果——眞正の教理  
三、如來 三身——衆生——善惡——方便——大慈大悲  
四、經典 同質異性——正確簡單迅速の方法、其他

# 他力眞宗

送定菊 料價半 截 貳七 拾紙 錢錢裝

他力眞宗の本義を明にして、其の實相と、假相とを辨じ、成佛の方法を説いたもので、眞に社長の警咳に接するの思ひがある。是こそば無明の闇に迷へる人士をして、光明の世界に入らしむる良書。

# 無題録

第一編 第二編 菊半 截 定價 送料  
第三編 第四編 第一、二編 各八拾錢 貳錢  
第三、四編 各八拾五錢 四錢

巨人世に興して、降魔の利劍を執り、亂麻の如き當面の非を悉く斷ち盡さんとして居る。依つて、その觸るゝところ克く截らざること無き痛刀の快味に對して、鬼神は哭し、聖者は恭敬禮讃して居る。また、具眼の僧俗は、この斷片の小題を讀んで救はざる救ひの尊さを看破するも、群盲はこの獅子吼に値ふて、遂に聾の如く啞の如くである。世の識者たるもの、速に、この縦横無盡に迸り出づる智慧の泉を掬して、大いに樂しみ、大いに利せられん事を切望して止まぬ次第である。

# 濯足堂漫筆

上製四六判クローズ美本箱入  
定價 貳圓  
送料 拾錢

内容  
▲普陀▲四時常春▲山水▲天然と人▲遊春雜記▲宜昌峽に遊ぶ▲楊子江を下る▲江南春未來▲舟中漫言▲大風▲雲▲海▲花▲江南の春▲菜花▲落花▲秋色▲冬の花▲雨▲竹▲無憂園の記▲燈火▲香▲樂▲味▲蜂▲桃柳▲茶▲稻▲石炭▲讀書▲李翰林集を讀む▲韓非子を讀む▲湛然居士集を讀む▲諸葛武侯▲劍南詩稿を讀む▲杜甫と彌耳敦を讀む。

# 孫子新註

三六判上製函入  
定價 壹圓  
送料 四錢

孫子を支那の古き兵書のみと閉却するものあらば大なる誤である。其の本領は外交、經世の眞髓を説く。是れを有して國家榮え、是れを讀みて國民昂る。寔に政治、外交、商事、教育、日常處世上の活教訓書として價値高く、是れが活用によりて得るところ、厚く、深し。社長は深き智識を以て能く此書の眞精神を味讀し簡潔明快に心解せらる。蓋し人生處世の好指針、國家立策の寶典として、大方の必讀を俟つ。

# 對支橫議

四六判  
定價 壹圓貳拾錢  
送料 六錢

支那政局の轉換の急なるは、恰も走馬燈の如く、窮りない。其の政局面を表裏縦横に解剖批判し、然も窮極する所は彼に非ずして我にあり、支那に非ずして日本に在る。附録『海外投資論』は農業、工業、商業に亘りて詳記せるもので、海外投資家必讀の活文字。



大谷光瑞師主宰

月刊  
雜誌

大乘

購讀料

一部四拾五錢 半年二圓六拾錢  
一年五圓 (各送料共)

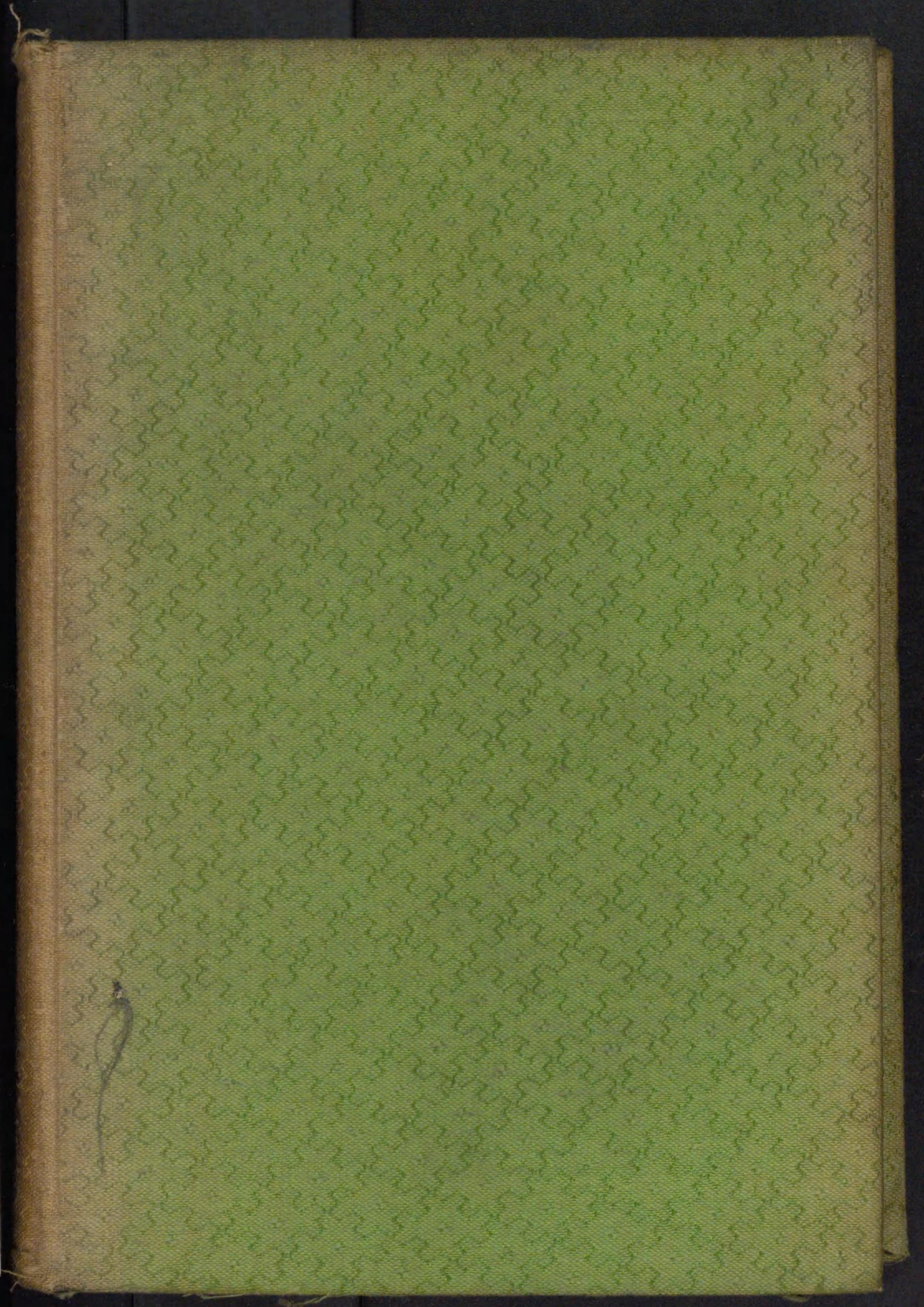
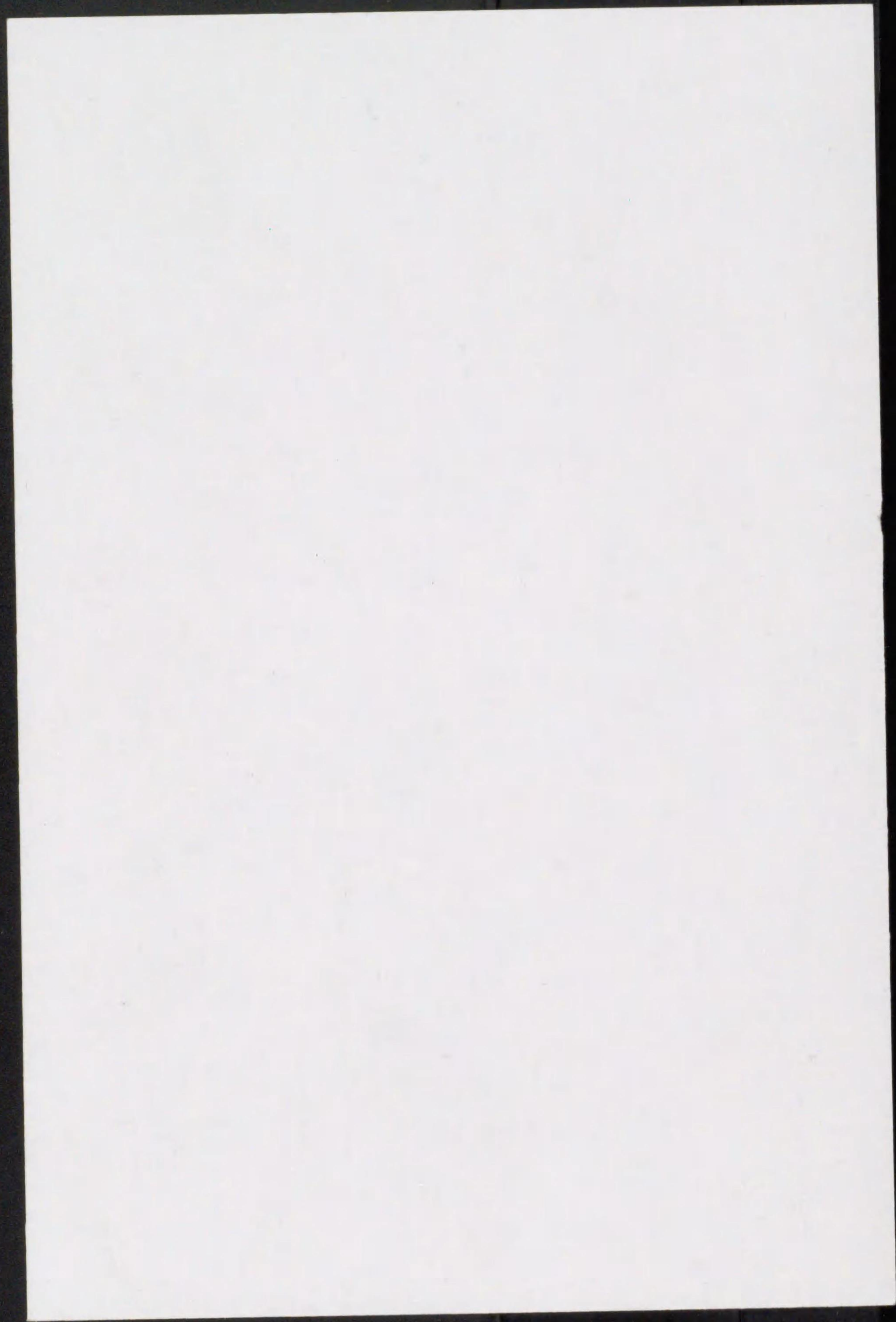
天馬空を行くやうに自在に大道を濶歩する者の聲を絶えず聞き続けやうとするには雜誌「大乘」の讀者となる事である。その社長たる大谷光瑞師を通して始めて吾人の耳に入る天來の聲はそれを纏めた著書でも讀める。しかし「大乘」によるやうに、月に又新にその警咳に觸れる譯には行かない。

竊に佛の深意を身に體して、世間の凡ゆるることの上に咀嚼して居る師である。佛典の解説はもとより時論隨筆に至るまで、眞を穿ち切實を極めて居る。眼の開いた現代人としては、折角のこの好伴侶の大聲を聽く特權を棄て、は同じ時代に生きた甲斐があるまら。



609  
88





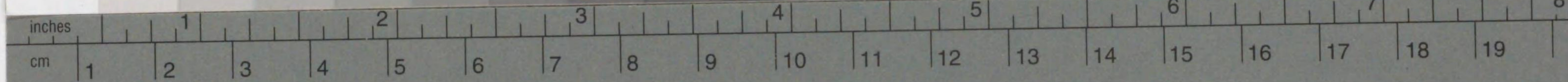


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

**A** 1 2 3 4 5 6 **M** 8 9 10 11 12 13 14 15 **B** 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

